夢の残滓

Kazuyoshi Hinomoto

記憶！買います！

　朝、ツイッターのタイムラインを眺めていた時、そのツイートが目に飛び込んできた。

あなたの記憶！高額にて買取ます。
もちろん、日常生活・仕事に必要な記憶は残します！

悪いジョークだ！その時はそう思った。
　週末の業務時間が終わる直前に上司に呼ばれた。どうせまたお小言だろうと思いつつも上司の元へ。
「君は何度、同じことを言わせるつもりだ！」といきなり怒られた。
「はぁ」
「はぁ、じゃないだろう！これがここ６ヶ月の君の営業成績だ！」
と言って、上司は僕の営業実績を見せた。
心の中では、好きで営業なんぞやっているのではない！と毒づきながらも・・・
「すいません！以後、営業成績を上げるために頑張ります」と言う。
「また、同じセリフか？前にも言った通り職能給を減額させて貰うからな！」
給料の減額！
前にも言った？
聞いていないと思いながらも反論出来ずにいた。上司の小言はそれから小一時間も続いた。
給料の減額は痛いけれど、対策は来週以降に立てることにした。ともかく、明日はデートだ！２週間程前に知り合った彼女とだ。明日あたり二人の関係が進展するかもしれない。気を取り直して行こう！
「私たち別れましょう」と彼女は言った。
知り合ってまだ２週間じゃないかと思いながら聞く。
「何でだよ？理由は？」
「あなたのことが良く分からないの！」と彼女。続けて言う。
「あなたの好みも判らない！どういう生き方して来たかも判らない！何だか中身の無い人間みたいなの！」
何だか前にも誰かに言われたようなセリフだった。
　自宅に帰るとダブルで落ち込んだ。冷蔵庫から缶ビールを取り出し、１個２個と飲んで行く。５個を数えた頃、かなり酔いが回ってきた。酒に酔っているせいか、嫌なことはパーと全部忘れることが出来たらいいな、とか馬鹿なことを考えてしまう。忘れてしまうと言えば、ツイッターに変なツイートがあったのを思いだす。あのツイート、お気に入りに登録していなかったので、仕方なく、またツイートされていないかタイムラインを探してみる。
無かった！
そのうちに酔いが回って眠くなったので寝ることにする・・・
　外が明るくなっていた。休日は目覚ましをかけないので、今、何時かわからない。時間を見

る為、携帯の画面を見る。午前８時だ。そのまま、いつもの癖で寝床で携帯を使って、ツイッターのタイムラインを見る。
見つけた！

あなたの記憶！高額にて買取ます。
もちろん、日常生活・仕事に必要な記憶は残します！

リンクが張ってあるホームページを確認する。
『記憶買取所』とある。住所を見ると自宅から１時間ぐらいで行ける距離だ。携帯では見にくいので、詳細を見るために起きて、パソコンを立ち上げる。
　『記憶買取所』の最寄り駅で降りる。１２時を少し過ぎたところだ。駅前でお昼を食べることにする。駅前には飯屋風の蕎麦屋が一軒あるだけだった。その店に入り親子丼セットを注文する。セットに付いている蕎麦を食べてみると、以外に美味しい。でも何処かで食べた味だ。蕎麦なんて似た味の店はいっぱいあるからそのせいだろう。食べ終わって、勘定を払い、お釣りを受け取る時。「いつも有難うね！」とそば屋のおばちゃんが言う。
どうして、飲食店は初めての客に対しても「いつも」とか「毎度」言う店があるのだろうか？
一々、客の顔なぞ覚えていないのか、似たり寄ったりの顔が多いせいか。
　『記憶買取所』のホームページには、地図はなく、電話番号さえ記載されておらず、ただ住所だけが記載されていた。探すのに苦労するだろうと思いながら住所の方向に向けて歩き出す。
　呆気ない程簡単に見つかった。この辺土地感がないはずだったが・・・
まるで、以前に来たことがあるみたいに簡単に目的地に着いた。そのビルは、奥まった路地にあった。以前、来たことがないか周りを見回してみる。
見覚えが無い。
それはそうだ、この駅で降りたの自体が初めてのことだから。そう思いながらも、なんとなく納得出来ない。
　『記憶買取所』と言う表札を見つける。表札以外は何の特徴も無い。ドアを開けて中に入る。入口に付近にカーテンが有り中が見えなくなっている。呼び鈴が有り、それを押す。中から、一人の男が出て来た。ごく普通の中年男だ。服装もスーツを着用している。
「記憶買取希望者の方ですか？」
「はい、そうです」と僕は答える。
「それでは、こちらの申込書類にご記入をお願いします」
そこには、申込みの動機と残したい記憶を書く欄と、後は住所・氏名等を書く欄が有った。
取りあえず、申込みの動機は適当に記入して、残したい記憶の欄には、『特に無し』と記入する。申込書類を提出すると、男はカーテンを開けて言った。
「では、こちらにお座り下さい」
そこには、歯医者の治療椅子のような椅子があった。ただ、歯医者の椅子とは異なり頭の部分にはヘルメットとみたいなものがあった。

僕はその椅子に座った。
「念のために申し上げますが、生活・仕事に必要な記憶は残りますので御安心下さい」と男は言い、錠剤と水を差し出す。
「この薬は？」と僕は聞く。
「処置するにあたり、睡眠状態になってもらいます。これはその為の睡眠導入剤です」眠っていたらしい。
「終わりましたよ」の声で目が覚める。おかしい、記憶はまだ残ったままだ。その疑問に答えるように男は言う。
「記憶はだんだん薄れいき明日の朝には完全に消えています」
続けて、男は言った。
「買取料金はいつものように月末に振り込まれます」
「いつものように？」と聞き返す！
「失礼しました！あなたは常連なのでついそう言ってしまいました。覚えていらしゃる訳ないのに」

あなたの記憶！高額にて買取ます。
もちろん、日常生活・仕事に必要な記憶は残します！

　そのツイートが目に飛び込んできた。月曜日の朝は最近、ボーとしていることが多いせいか、その意味が最初分からなかった。

悪いジョークだ！

会社へ出勤するため家を出る・・・

白の思い出

　あれは、小学生になる前の冬のことでだったと思う。母親と一緒におじいちゃんの家に行った。そこは、あたり一面雪景色の白い世界だった。そして、あの女の人と出会う。
　おじいちゃんに連れられて、おじいちゃんの家の近くの山道を歩いていた時のこと。ふと、道の脇を見る。そこには木がない白い空間が広がっていた。その空間を白い着物を着た女の人と真っ白な狐が戯れるように走っていた。
「女の人と白い狐が見える！」と僕はおじいちゃんに言う。
「はて？　私には見えないが、白い狐は昔の神様と言われている！　何かいいことがあるかもしれないよ」と言って周りを見る。
　おじいちゃんには見えないらしい。僕は女の人と白い狐に視線を送る。女の人は僕を見てにっこり笑う。
　翌日、僕は家族に内緒でおじいちゃんの家を抜け出す。昨日、女の人と会った場所まで行く。そこには、他の場所と同じく木々があるだけだった。そして、奥まった場所に小さな祠があることに気づく。祠の中には狐の石像が一つあった。
「坊や！　何処から来たの？」
振り向くと昨日の女の人がいた。
「東京から」と僕は答える。
「ここは気に入った？」
「うん、雪があるから」
「東京では雪は降らないの」と女の人は不思議そうに聞く。
「降るけど、こんなには降らないよ。滅多に雪が積もることないもの」
「そうなんだ。私はここにずっと住んでいるから分からない」
「ずっとっていつから？」
「生まれた時から・・・」
「お～い！　ヒロシ！」と突然おじいちゃんの声。
僕は降り返っておじいちゃんを見る。
「こんな所で一人で何をやっている？」
やはりおじいちゃんには見えないようだ。
その理由を尋ねようとして女の人を見る。でも、そこには女の人の姿は無かった。
　冬休みが終わり、今日から学校が始まる。僕は某有名私立高校の２年生。もっとも有名と言っても、出来が悪いので有名な学校。
担任が転校生を紹介する。女子だ。名前は『白木真白』。変わった名前だ。名前の通り肌の色が白い、しかも美人。この学校のには不釣り合いに思える。美人は頭がいいと単純に思ってしまうのは僕だけだろうか。それにしても彼女の顔には見覚えがある。何処かで会ったことがあるのか、それとも知っている有名人の顔に似ているのか？　よく思い出せない。
「じゃ！席は須藤の横が空いているからそこを使って」と担任が僕の横の席を指差して言う。『

須藤博』、僕の名前だ。
「よろしく須藤君」と転校生が席につきながら言う。その瞬間、脳裏にあの光景が浮かぶ。女の人と白い狐・・・。隣りの転校生を見る。顔はあの女の人に似ているが、もっと大人だった気がする。もっとも、着物を着ていたので、大人に見えたかもしれない。何より、僕が子供だったので、高校生の女の子が大人に見えたかもしれない。ここまで考えてあることに気づく。あれは十年も前のこと。隣りに座っている白木さんも十年前は子供だったはず。あの女の人と同一人物の訳がない。理屈では分かっているが、僕には彼女があの女の人に思えてならない。
　白木さんが転校して来て一週間が過ぎようとしていた。その日、僕と彼女はたまたま日直になり帰りが一緒になった。帰る方向が同じだったので、帰りが一緒になった。帰り道を歩きながら僕は気になっていたこと聞く。
「白木さんには年の離れたお姉さんいる？」
「私は一人子よ」と彼女は答える。
「じゃ！　白木さんはお母さん似？」
「どうしてそんなことを聞くの？」と彼女は訝しげに言った。
「子供の時に君にそっくりな女の人に会ったから。白木さんの身内の人間じゃないかと思って」
「どこで？」
僕はおじいちゃんの家があった場所を彼女に告げる。
「それは私よ！」と彼女は言った。
「え！」
「だから、須藤君が子供の時に会ったのは私」と彼女は分けの分からないことを言う。
「年齢的に合わないよ！」と僕は言う。
「私は歳をとらないの！　人間ではないから！」ますます分からないことを言う。僕は混乱して、どう答えていいか分からず。無言でいる。
「助けて欲しいの！　あの時、白い狐がいたの覚えている？」と彼女は言う。
　ここで、僕は彼女が真実を語っていると気づく。白い狐のことを知っているのがその証拠だ。
「白い狐は古の神！　でも今、消えかかっている」
「消えかかっているとはどう言うこと？」
「神は拝むものがいないと消える。それが宿命！　あなたのおじいさんが亡くなってから拝む人がいないの」
「どうすればいい？」と僕は聞く。
「ただ拝むだけ！　それだけでいい！　拝む人間がいれば神は存在出来る」と言う。
言い終わると彼女の姿が消えた。
「大丈夫か！」焦って彼女がいた空間に叫ぶ。
「心配しないで！　姿を消しただけ！　私は人間ではないが神でもない。神みたいに消えることはない！」
　休日に僕はおじいちゃんの家があった場所へ行った。祠へ行き、来るとき買った油揚げを供え拝む。作法は良く分からないが、狐だから油揚げを供えた。

「ただ拝めばいい！　それだけでいい！」彼女の声が聞こえた気がした。
　翌日、学校へ行く。僕の隣りには、女の子が座っていた。彼女ではない。別の子だ。
「あれ席変わったんだ？」と聞くと。
「何を言っているの私の席は前からここよ」
誰も彼女のことを覚えていない。
　一年が過ぎた。僕は祠にお参りに来た。
雪が降り出して、白い世界が広がっていく。

初めまして

　猫の記憶は三日間しか持たないと言われている。

　ミィー太郎はいつもの公園に行く。いつもの場所でいつもように日向ぼっこをするためだ。いつもの場所、一番陽のあたる場所。でも今日はいつもと違っていた。先客がいたのだ。先客、白猫の若い雌に対してミィー太郎は言う。
「初めまして」
「初めまして」とその雌猫は答える。
「見かけない顔だけど？」とミィー太郎。
「私はミュウ。昨日、ここへ引っ越して来たの。よろしく」とミュウは答えてから気がついたように言う。
「ひょっとしてこの場所、あなたのお気に入りの場所？」
「そうだけど。いいよ！　お近づきの印に進呈するよ」
「そう。ここは陽あたりいいものね。でも悪いわ！　一緒に使いましょう」
　こうして、ミィー太郎はミュウの隣りにいることになる。毎日、二匹は一緒にいるうちに恋に落ちる。
　でも二匹のそんな幸せな日々は長くは続かなかった。ミィー太郎の飼い主が引っ越すことになったからだ。ミィー太郎も飼い主について引っ越すことなる。引っ越しの日、ミィー太郎は飼い主夫婦と共に車に乗る。旦那さんが車を運転する。ミィー太郎は奥さんの膝の上に。抗おうと思ったが、ある考えてが浮かび、大人しくする。ミィー太郎は車の窓から移りいく景色を見て、記憶に留めようとした。
　どのくらい時間が経っただろうか車が止まった。ミィー太郎には、随分と長い時間に感じられたが、実際はそうでもなかったかもしれない。飼い主夫婦の奥さんが車から出ると同時にミィー太郎は奥さんの腕から飛び出した。そして、車が来た方向へ一目散に走り出した。
　ミィー太郎は、ひたすら走った。気がつけば、日が暮れようとしていた。ミィー太郎は疲れと空腹でふらふらだった。それでも走るのをやめなかった。
　翌朝、ミィー太郎はどこかのマンションのゴミ捨場の横で目覚めた。目覚めると同時に猛烈な空腹を感じた。このまま走り続けたら体が持たないと思い、とりあえず食べ物を探すことにした。しかし、ミィー太郎にはどうして食べ物を探せばいいかわからない。
「お～い！目覚めたか！」と突然声が挙がった。
声の方を見ると、がっしりした体のトラ猫がいた。
「あなたは？」
「朝そこで、お前さんが倒れているのを見つけた。良く見ると寝ているだけだったのでそのままにして置いた」
ミィー太郎は繰り返し聞いた。
「あなたは誰ですか？　名前は？」
「俺はこのあたりで生活している野良猫。この辺の猫は俺のことをトラと呼んでいる。お前さん

もそう呼んでくれ」
　彼はそう言うと、僕を見て言う。
「お前さんは何と言う名前なんだ？」
「失礼。ミィー太郎と言います」
「ミィー太郎か？　ところでミィー太郎、お腹は空いていないか？」ミィー太郎は思わず頷く、それを見ていたトラは笑いながら言う。
「じゃあ、朝飯でも食いに行こうか？」と言った後言い直す。
「朝飯ではなく、もう昼飯か」
トラと一緒に行ったのは、飲食街と思われる場所だった。
「ここいらは飲食店が多くて、残りものの食べ物が幾らでも捨ててある。お前さん、飼い猫だったみたいだから捨ててあるものを食べるのに抵抗あるかも知れないが、それさえ気にしなければ食い物には困らない」
「なぜ飼い猫だったと分かるのですか？」
「それがお前さんが腹を空かしている理由だろう」
腹を空かしているのは、一日中走っていたためだ。とミィー太郎は思ったが、時間が有ったとしても食べ物を確保できたかどうか。
「さて、お前さんこれからどうする？　ここに住むなら歓迎するぜ」とトラは食事が済むと聞いてきた。
「ここに住むのも悪くないが、僕には行かなければならない所があるから！」
僕がまだ旅を続けるのを知ってトラはそれから、色々と食べ物の確保の仕方を教えてくれた。そのためその日の出発は夕方近くになってしまった。僕はもう遅いから今日はここに泊まっていけと言うトラを振り切り、また走り出す。
　ミィー太郎は走りに走った。走っては疲れ果てて眠り、起きてはまた走り、空腹で食べ物を確保し、食べてはまた走った。どのぐらい走っただろうか。ミィー太郎は何の為に走っているのか？　何処へ向かって走っているのかもう覚えていない。ただ、戻らなければと言う気持ちが強くありその気持ちに突き動かされて走った。
　そうして、何日か過ぎた頃、ミィー太郎は自分がなんだか懐かしく感じる場所にいることに気がついた。向こうに公園が見える。ミィー太郎は公園に入って行く。陽あたりの良い場所に白猫の若い雌が日向ぼっこしている。ミィー太郎は雌猫に近づき言う。

「初めまして」

毒々しい虫

　その日、玄関のドアを開けると毒々しい虫がのたくっていた。虫は１０センチ位で鮮やかな緑色しており所々に黄色の斑点があった。私は気色悪さで半分パニックになりながら丸めた新聞紙で叩き潰す！ピシャリと虫は潰れました。気色の悪い緑色の体液が飛び出しました。電車の時間がぎりぎりなのでそのままにして家を離れました。

　仕事を終えて帰宅。玄関を見ると虫の死骸は無く緑の染みだけが残っていました。酔っていたので気にせず就寝しました。

　翌日、起きるとなんだか腕の辺りがもぞもぞしていました。見るといつもより血管が浮き出ている気がしました。飲むのもほどほどにしょうと思いました。

　翌々日、腕のもぞもぞ感は酷くなっていました。腕を見ると血管の横に複数の緑色の筋が・・・
試しに針でつくと小さな緑色の虫が飛び出します。あの虫です。私は急いで病院へ行こうとタクシーに乗りました。
　「お客さん大丈夫・・・」客が崩れ落ちたように見えたので運転手は声をかける。客の姿は無く服にまとわりついた無数の虫が・・・

何かおかしい

　道を歩いていると向こうから二人の人間が歩いて来る。いや何かおかしい！向かって来る人影の一人には頭が無く、もう一人には両腕が無かった！

　僕は急いでその場を逃げ出してコンビニに駆け込んでだ。「大丈夫ですか？」と店員が訪ねる。
「・・・」
言葉も無く僕は店員の方を見る。
随時、顔色の悪い店員だなと思った途端、店員の左目がどろりと垂れ落ちる。そして、笑顔で言う。
「こりゃ失礼！そろそろ落ちる頃だと思っていました」
僕は店員の方を向いたまま後ろ向きのままに店を出る。

　どこをどう走ったか気がつくと公園のベンチに座っていた。公園で途方に暮れていたいると懐中電灯の光が！
「こんな所で何をしているのですか」とお巡りさんが訪ねる。よかった！このお巡りさんは普通の人間だ！
その時、お巡りさんが額の髪の毛をかきあげた。穴がある！銃痕みたいだ！
「わっわあ！」と僕は叫び声を上げる。
そんな僕にお巡りさんは言う！
「やっぱりあんただったか！よく聞いて下さい。ここは死後の世界！あなたはついさっき電車に轢かれて死んだのだよ」

思い出した！
その瞬間！僕の体はバラバラの肉片になり崩れ落ちる！

人形

　その人形を見つけたのは娘が先だった。
「パパ！あのお人形さん買って？」見ると古い人形だった。
ここは骨董屋。この日は家族でレストランへ行く予定だった。ママとの待ち合わせ時間にまだ余裕があるので、私はこの店へ娘を連れてきた。値段を聞くと案外安かったので購入することにした。レストランから帰ると娘は早速人形と遊びだした。
「はじめまして！ユイちゃん」と娘。
「ユイなんだかユミに似ているね」と私。『由美』娘の名前だ。
「ユイちゃんは私の妹！だって左目にほくろがあるもの」左目ではなく左の目尻、幼い娘には難しい言葉なんだろう。人形には左の目尻にほくろがある。私の娘は右の目尻にほくろがある。その日以来、娘はいつも人形といつも一緒だった。今日は娘の為に洋服を買って来た。娘に渡す。
「有難う！」と言って娘が受け取る。
「ユイちゃんの分」と言って人形の服を人形の前に置く。そうしないと娘が妹の分はと言って機嫌が悪くなるからだ。だから、娘に何かプレゼントをする時は人形の分も買うようになった。娘も喜んでいた。あの日までは・・・

　その日、ママより早く家に帰った。玄関のドアを開けると血の臭いがする。部屋に入ると、娘がいた、バラバラになって、血まみれになって、そこにあった。
「殺したわ！」突然人形が喋りだす。
「なぜだ！」と私は何とか声を出す！
「由美はパパの本当の娘で、私がお人形なんて不公平だわ！だから殺した！」怒りに狂った私は人形を足で踏み潰す。

　あれから三年がだった。娘が交通事故で死んでから。私達夫婦も娘を亡くした悲しみを乗り越えられた。二人目の娘も生まれた。
『結』と名付けた。死んだ由美とそっくり。結の左の目尻のほくろを見ながら思う。

黒猫の毛が白かったら

「お父さん！　来て！　一匹だけ黒い猫がいるよ」とケンイチが驚きの声を上げる。
「本当だな！　隔世遺伝かな」とケンイチの父親も驚く。
この日、白い親猫から黒猫一匹と白猫三匹が生まれた。雄と雌は二匹づつ黒猫は雄だった。黒猫はクロスケと名付けられた。四匹は母親のもとすくすくと育っていった。黒猫も自分の毛の色が他の子猫と違っていることもあまり気にせず過ごしていました。

　しかしある日、白猫の雌、クロスケの妹に当たるミュウと呼ばれいる猫が言う。
「どうしてあなたの毛の色は黒いの？」
「僕には分からないよ！　最初から黒かったから」
「お母さんが白猫なのに黒猫なんておかしいわ！　あなただけ母親が違うのではないかしら？」ととんでもない事を言う。
「そんな事を言うものではありません！」とさすがに母親が割って入る。
「じゃあ！　何で黒猫なの？」と子猫は腑に落ちない様子。
ミュウは母親の手前それ以上はこの話題には触れない。他の白い子猫はこのやり取りに注目していた。この日から白い子猫達はクロスケを無視し始めた。

　その日はケンイチの父親がめづらしく夜遅く帰宅した。
「ただいま！」大きな声である。
酒に酔っているらしい。きっと外で嫌なことでもあったのだろう。父親は子猫達を見た。そして、黒猫を掴み上げると言った。
「黒猫！　縁起でもない！」
と黒猫を箱に入れて外へ出て行く。暫くして父親は帰ってきた。箱は持っていない。
「猫は？」とケンイチは帰ってきた父親に聞く。
「捨てて来た」
「え！　何処へ？」
答えは帰って来ない。代わりにいびきが聞こえる。ケンイチは外へ出て探すが、当てがないので見つけられなかった。翌朝、父親を問いただすと、公園へ捨てて来たと言う。遠くの公園だ。父親と共に行く。猫を入れた箱は見つかったが空だった。父親はぼそりと言う。
「悪いことをしてしまったな」

　ケンイチと父親が公園に来る少し前のこと。クロスケが目覚めると目の前に虎がいた。いや、体の大きなトラ猫がいた。
「おい！　小僧！　やっと目覚めたか！　早くしないと朝飯食いそこねるぞ！」
「朝飯？　あなたはどなたですか？」
「俺？　俺はここら辺りの縄張りを仕切っている者だ。みんなはトラと呼んでいる」

「僕はクロスケ。ところで、朝飯て？」
「なに。ここら辺りは飲食店が多いので余りものを漁りに行くのさ！　でも早くしないとゴミで捨てらてしまう。で、行くかい」
クロスケはトラについて公園を離れる。

　それから、３年が過ぎた。クロスケはもう子猫ではない。トラが野良猫で生きて行く方法を教えてくれた。そのおかげで生きてこれた。クロスケは久しぶりに捨てられていた公園に来た。ここは、捨てられた記憶を思い出すのであまり来ないようにしていた。だが急にここへ来たくなった。昨日、トラが死んだから・・・ふと公園の隅を見ると見知らぬ猫がいる。いや、見知らぬ猫ではない。記憶にある！　薄い汚れいているが毛の色は確かに白・・・
「ミュウ」
白猫がこちらを見る。
「ミュウ！　ミュウだな！」もう一度言う。
「クロスケ！　クロスケなの」
「こんなところでなにをしている」
ミュウの話しでは、飼い主親子の家が火事になり、親兄弟とも飼い主親子とも離れ離れなったと言うことだ。
「それでお母さんや兄弟達、あと飼い主親子はどうなった」
「お母さんは１年前に亡くなったわ。兄弟達や飼い主親子は消息はわからない」
「みんな無事だといいが」
「本当にそう思う？」
「ああ」
「どうして？　飼い主はあなたを捨てたし、私たち兄弟は冷たい態度を取ったのに」
「もう昔のことだ・・・でももし、俺の毛が白かったら・・・いや！　俺の毛が白かったら、お前と再開出来なかったかもな」

公園に黒猫と白猫が並んで座っている。
最近、よく見かけるようになった光景だ。